
丘に眠る記憶

山田サンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丘に眠る記憶

【Nコード】

N6905I

【作者名】

山田サンタ

【あらすじ】

西暦2112年世界は宗教戦争によって過去に類を見ない戦争に巻き込まれていた。莫大なバブル資金の集約である太平洋の小国エスペランサもまたこの世界大戦に巻き込まれた。世界中の人種からなるこの国には開戦まで軍隊も無かったが、莫大な資金を武器にするプロジェクトを立ち上げた。

総司令官には日本人女性 佐伯ゆかりが選ばれた……

少し秋を感じさせる風が前髪を揺らした。幾度も登ったこの丘から漁をする漁船が小さく見える。斜面には小さな果実をつけた木々がまるでおとぎ話の世界のように、沈もうとする太陽に照らされていた。

5年前、この地を舞台に壮絶な争いがあったことなど自然はすべて許して

くれているかのようであった。

「司令官そろそろ行きませんかと作戦会議の時間に遅れますので・・・

」

ソルト上等兵が時計を気にしながら坂を登って来た。彼には無理を言って

リニアハイウェイを降りてもらい、この友の眠る丘に寄り道をしてもらった。

防衛軍定例作戦会議は20時からである。少し急がねばならないかもしれない。

まあ、こんなに平和になったこの星で急いで決めなければならない議題も

無いとは思うのだが・・・

「わかりました、行きましょう。もう花は供えましたから」

「司令官はよくこちらにいらっしゃるのですか？」

「ええ、何度も。あの夕日を見に来るんです」「そう、あの日と変わらず

海に沈む太陽。友と見たあの日の太陽と同じ・・・

西暦2112年世界は宗教戦争によって過去に類を見ない戦争に巻き込まれていた。

元々は一部の地域での抗争だったが、武器を収める大国を次々に巻

き込んで

あつと言う間に世界大戦になってしまった。私の国は人口26万人の極小国である。

面積こそ590平方キロと太平洋の島国としては小さくは無いが65年前に独立した

ばかりの非力な国だ。実際この戦争が始るまで軍隊というものも存在しなかったし

そもそもリゾート開発によって作られた島だ。

世界中のバブル資金がここに投資され、学校・病院・ハイウェイ・空港が次々と

整備された。ハイウェイは実験段階のリニアタイプが建設され、さらに地下都市開発も

莫大な資金が投入された。この中の地下トンネルには海底都市アトランテまで

約150kmの海底高速が造られた。防衛軍本部はこのアトランテにある。

島全体はリゾート部と都市部分に別れ5年に及んだ戦争で都市部は壊滅的な

被害を受けたが核攻撃を受けなかったのは有り難かった。

2125年わが国への攻撃が始る8ヶ月前に核使用に関する世界協定が締結し

この戦争における核被害は14カ国22発で収まった。

全世界の核爆弾保有総数は約2万発であり、それから言えば被害が少なくて

良かったのかもしれない。最も被疑の大きかったのはニューヨークで2発の

小型核爆弾が使用された。車のトランクに積んであるアタッシュケースが

マンハッタンを全滅させた。死者は200万人以上だったはずである。

もう1発は住宅地であるスミスタウンである。こちらの方が被害は少なかったがそれでも3万人が犠牲になった。その被害に懲り核使用禁止が提案されたのはなんともしがたい。初の核使用国がテロの核使用によりその恐ろしさを

体感したのであろうか。

「司令官リニアラインに入りますのでシートベルトをお締めください」

「ソルト上等兵悪いけど音楽を流しても良いかしら？どうもあのキーンとした

音が苦手で・・・」

「わかりました司令官の好きなjazzにしましょう。2030年のものが

ありますので」そういうと当時中国で人気のあったラディッシュの演奏が

流れてきた。よく結婚前に主人が車で流していたので憶えている。

車はゲートを抜けるとアッパーボードで停車した。ここからは自動運転になる。

ボディの下でロックのかかる音がすると猛烈な加速でランプウェイに入った。

この500m程の加速ラインで時速300kmまで速度を上げ本線に入る。

流線型と遮音の行き届いたボディーからは振動や風切り音は皆無だが、あの

僅かに聞こえるモーターのような音だけはどうしても好きになれない。

会議まであと1時間半。充分に間に合うだろう。少し休もうと室内灯を

消した。トンネルの黄色いLEDが眠気を誘っていた。

西暦2110年アフガニスタンとカンボジアが銅鉞山の利権から戦争を始めた。

衛星放送のテレビ番組で連日世界に向けて情報が発信されたが、世界の注目は2カ国の

動向では無くそこで使われている最新鋭兵器であることは言うまでも無かった。

その中で注目されたのはアメリカ製のレールガンである。2070年代に実用化

されてから各国で使用されていたが、ほとんどは陸上火気か戦艦からの攻撃用であり

消費電力の大きさと衝撃から戦闘機への搭載は見送られていた。それが超小型戦闘機LSWに搭載されたとあって世界中の兵器開発者・軍関係者が

注目していた。戦いはアフガニスタン側の圧勝と思われたが2111年1月3日に

世界で3発目の核兵器をカンボジアが使用した事によって話は一変した。

それはコンパクトタイプと呼ばれる核兵器でアタッシュケースで持ち運べる。

この時もアフガニスタン軍に潜入していたスパイがLSWの格納庫で爆破させた。

実験ではこのタイプの核兵器は周囲1km四方を破壊するとされていたが

実際にはこの爆発によって半径2kmが跡形も無く吹き飛んだ。

すぐさまアフガニスタン軍も核ミサイルの攻撃を開始したが、カンボジアと同盟国

である中国・ベトナム・タイの人工衛星からのレーザー砲によって

すべて無力化させられていた。この時世界は核弾頭ミサイルが実戦では何の役にも立たない事を思い知らされた。そこで開発されたのがドルフィン型と呼ばれる魚雷型ミサイルである。

深度300メートル以下で時速800kmの推進力を持つ超電動魚雷である。

形がイルカに似ている事からこう呼ばれているがその大きさはイルカの3倍はあり、容易に大型核弾頭を搭載できた。この兵器は最終的には海岸沿いから

河川に入り込み主要都市に到達すると浮上・低空飛行・潜航を繰り返しながら目標を破壊する。

実際にこの後の世界大戦でも8発が使用された。しかしターゲットを正確に

攻撃できたのはこの中の僅かに2発で後はまったく関係の無い農村部や

港で誤爆したか、河口のレールガンによって破壊された。

アフガニスタンへの核攻撃から1年2カ月後いよいよアメリカが参戦した。

理由はグアム・沖縄太平洋前線基地を核攻撃されたことからである。特に津堅島沖2kmに展開する米軍のメガフロート基地へのドルフィン攻撃が

その最大のきっかけであった。LSW戦闘機1700機 爆撃機140機を

一瞬で失い米国兵・自衛隊員あわせて2万人が犠牲となった。

攻撃したのは中国であるのは明白であったが結局証拠不十分のまま見切り

攻撃を中国に対して加えた。それが2112年2月14日であった。バレンタイン・アタック・・・その日が世界を変えてしまった。最初はピンポイントでLSWによる軍事基地や軍需工場への攻撃であったが

2115年チベット仏教軍の協力を得て深？への核攻撃が成功すると中国の大型航空母艦隊がアメリカに向け発進した。22隻の航空母艦と80隻から

なる護衛艦の大編成である。各護衛艦でさえレーザガン200基高角砲500基

という兵装であった。アメリカの要請で日本も潜水艇25隻イージス艦15隻が

追尾していた。この時は日本と中国艦隊との間には軍事的な衝突は無かったが

その2年後中国の北海道千歳基地への攻撃を機に日本も参戦した。直接の攻撃は

しなかったが支援部隊としてアメリカ軍に就いたため仏教国連合から非難を受け

国内でもテロ行為などが頻発化した、その為政府が仏教団体の弾圧に踏み切ったが

これが東南アジア諸国を刺激し日本の仏教徒を救出するという名目で東京に

ミサイルが飛来するようになった。本来であればアメリカの人工衛星によって

迎撃されるはずであったが中国との戦火の中そんな余裕はなかった。この事により首都東京は壊滅的打撃を受けた。中枢を1箇所に集中していた

この国の軍備は4ヶ月で無力化したが、民間自衛組織が開発したRA-3型と

いう自律型ロボット兵器が内戦を拡大するのを防いでいた。

これは家電メーカーと自動車メーカーの共同開発による運搬機を改

造したもので

タングステンとコバルトのボディは強靱で原子力エンジンがパワーソースである。

8基の自律型レールガンとレーザー砲を装備し時速120kmで移動する事ができた。

その機動性と戦力の実用性から各国が同型モデルを開発したが量産化されたのは

既に終戦の声が聴こえてきた2126年の事であった。

佐伯ゆかりがエスペランサのハイランドシティーに引っ越してきたのは

丁度アフガニスタンとカンボジアが開戦した年の6月だった。父親の転勤で家族と

共にペルーからやってきた。元々出身は日本であったが10歳の頃から父の仕事の

関係で海外を転々としていた。

「お母さん私のお出かけ用の靴どこに入れたあ？」まだハイスクールのゆかりは

家族の中ではアイドルのような存在である。

「ほらやっぱりそうなるんだよ。ゆかりは母さんの言う事全然聞かないんだから」

次男の祐介が茶化す様に言うと長男の真吾が口を挟んだ。

「ゆかりは引越しの片づけをしないで何処にお出かけしようって言うんだい？」

「違うもん。あれは大事な靴だから部屋にしまおうと思っただけ！そういうと白いケースを開けてまた探し出した。」

「ゆかり、アレはあなたの衣装ケースの一番下にしまったじゃない。しょうがない子ねえ」

母親の涼子が笑いながら入ってきた。46歳にしては若く見えグリーンに染めた髪が

似合っていた。

「さっきテレビでやってたんだけど、アフガニスタンの圧勝なんじゃないの？」

それにしてもLSW型戦闘機って凄いやねー」祐介がその性能を解説した。

「祐介やめなさい。仮にも人がたくさん死んでるのよ、そんな兵器

なんて要らないわ」

母が諭すように言った。そもそもエスペランサへの転勤を希望したのは涼子であった。

ブラジルの企業GLに勤める夫の佐伯俊夫は香水の会社に勤めるエリートだ。

香水の研究開発をしており最近では医療用香水の開発をしていた。

2080年には3次元TVシステム・サーディアにも搭載され料理番組や

旅行取材では現場の臨場感を匂いで再現させていた。ただ戦争の影響もあり

ペルーの社会情勢に不安を覚え中立国であるエスペランサに引越す事を決めた。

「お母さん、お父さん何時ごろ帰って来るの？」ゆかりが自分の部屋から大声で聞いている。

「今夜は遅くなるから先に寝てなさいってさつき連絡が入ったわ」それを聞いて何かブツブツ言いながら部屋から出てきた。

「今日はみんなで外食するって言ったのにー。アトランテ行きたかったー」

ここからアトランテまでは車なら40分高速艇なら1時間だ。

「オレはめんどくさいからここで良いよー。ね、母さん80階の寿司屋行こうよ」

祐介が口を挟んだ。フェンシングをやっているためかスリムな割りにがっちりした

腕をゆかりの首に巻きつけながら頭を持ってうんうんと頷かせた。

「お兄ちゃんやめてよー、分かったから寿司で良いよ、寿司で」ゆかりがこう言うと

「寿司が良いでしょ？」また腕の力をかけていた。

「二人とも遊んでる暇があったら片付けを手伝いなさい、ほら早く」母の言葉に二人は顔を見合わせて舌を出した。

それを長男の真吾が笑いながら見守っていた。

ゆかりたちが入居したマンションは95階建ての高層タワーでエスペランサ島の

西の街ハイランドシティに在った。エスペランサはブーメランのような形をした島で

中央にミッドランドシティ・東側にイーストウィングタウンが在りミッドランドシティ

からはリニア高速道路が150km先の海底都市アトランテまで繋がっている。

ここは完全に商業都市で居住者は施設関係者が政府の要人である。

アトランテは24時間眠らない街だ。トレードセンターを中心に病院・学校・ホテル

警察・ショッピングセンター・歓楽街とすべて24時間開けている。イーストウィングタウン近くの空港には24時間到着便がありその

乗客がアトランテに吸い込まれてゆく。エスペランサの人口は26万人ほどだがビジネス

スや観光客を

合わせると優に30万人を超える。

佐伯俊夫が勤めるGLアトランテ研究所もこの海底都市のセンタービル17階にあった。

佐伯俊夫の研究室では香水によるストレスへの影響を調べていた。医学的にもアロマテラピー等ですでに実証されているが、GLの研究室では

さらに人間や動物を臭いで制御する実験をしていた。古代より惚れ薬など

医学的な信憑性は別として、香りとして楽しむ以外の目的を与えられてきた

香水だが、ここではその効果を実証するため様々な実験が繰り返されてきた。

ペールー支社では主に動物の本能的行動の制御を研究していたが、そのデータの

検証が今回のテーマである。

これにはエスペランサ政府からも補助金が出ており香水の平和利用を最終開発目標に開発が進められていた。この日は赴任初日という事もあり所長の

エリックと打ち合わせを兼ねた食事をする事になっていたのだが、家族に話すのを

すっかり忘れていた。

「もしもお父さん？わたし・・・ゆかりよ。今日は家族皆で食事するって言ったのに

嘘つきなんだからー お父さんに渡したいものがあったのよ。書斎の机に

置いとくからね。じゃあおやすみー」

ピアスからメッセージが自動で流れてきた。ゆかりは小さい頃から父親の

研究室によく遊びに来た。休みの日も俊夫が留守の時は外出するが家に居ると

一日中引っ付いているタイプの子供だった。17歳になった今でもこうして

時々仕事場にメッセージを送ってくる。上が二人とも男の子で甘やかされて育った

せいもあるかもしれないが、俊夫にとっては目に入れても痛くない娘であった。

「佐伯さん、行きましようか？今夜はとっておきのディナーを用意しましたよ

肉料理は好きですよ。いいワインが届いたので開けましょう。

2080年物の

ラトウルですよ」所長のエリックは57歳の白髪の紳士だアイルランドとフランスの

混血で男から見ても2枚目である。身長はそれほど高くは無いが176cmの俊夫より

2〜3cmは高そうである。研究室を出てエレベーターで70階のターミナルへ出た。

この階は海底面と接しておりアクリル製の天井は深度1500mのライトアップされた

海を映していた。暫くするとオートトラムが近づいてきた。グリーンLEDライトが

綺麗である。このトラムはアトランテの30本ある主要柱、兼ビル郡を結ぶ高速リニアだ。

最高速度は140キロだが車両の最後尾が切り離されホームに入ってくるだけで

メイン車両は一度も止まらずに走っている。1周約36kmを周回する車両は5本あり

ほぼ3分間隔でホームから追尾車両が発車する。

「それにしても凄い都市ですねアトランテは。ここなら何かあっても安全そうだ」

「佐伯君、やはり君も今回のアフガン・カンボジア戦争は飛び火す

ると思うかね」

「はい。中国がおかしな動きをしているようですよ、多分長期戦になれば必ず

アメリカと中国はまずい事になるのではないかと・・・」二人は前の車両に

移動した。二人が移動すると扉が閉まり追尾車両が切り離された。

暫くすると次の駅から出た追尾車両が追いついてきた。赤いシグナルを点滅しながら

ドッキングを完了すると何人かが本車両に移って来る。それと入れ替えに佐伯たちは

追尾車両に乗り第27タワーで降りた。

「センタービルから第27タワーまでだと5分程なんですね」佐伯はそっぴいなながら

ドームの壁を走るオートトラムを眺めていた。

東側の窓から南国特有の朝日がリビングルームに注がれている。

9時を過ぎれば

遮光スクリーンをONにしななければならないが、この時期でも朝方は心地よい。

「お父さん、ちょっと待ってよー」ゆかりがリビングから慌てて走ってきた。

「忘れ物はない？ ハンカチは持った？」

「やめてよーお父さん。子供じゃないんだからね」ゆかりが靴を履きながら言った。

俊夫の会社にゆかりが入社してから通勤はほとんど一緒である。

しかし、それも来年の春までの話だ・・・俊夫の研究室のジエームスと結婚する

予定である。

「お父さんブローチゆがんでる・・・はいOK」エスペランサに引越してきた日に

ゆかりに貰った銀細工の通信用ブローチである。外出時はいつも付けていた。

「かおり、最近ジエームス君来ないけど上手くいつてるのか？」

「もちろんですよ。でも・・・なんかお母様の具合が良くないんですって。」

今イーストタウンの病院に入院してるみたい」

「かおりはお見舞いに行かないのか？」エレベーターが地下4階の駐車場に着いた。

俊夫の車は標準的な電気自動車である。8人乗りのセダンタイプでリニアハイウェイに

入ると風の音が結構うるさく、150kmの低速車線を走る。

「お父さん、そろそろ新しい車にしようよ。タタの新型なんか最高

「なんだけど・・・」

「タタはインドの高級車メーカーでF1グランプリでは常勝チームでもある。」

「値段は俊夫のセダンが5台は買える代物だ。」

「そんな金があったらクルーザーを買おうよ」 実際今の給料で家族を養っていいは

夢の話だが、俊夫はどちらかという物欲が無い方なのかも知れない。

突然サウンドボードから音声が出た。

「ニューズをお知らせします今日未明ニュージーランド・ウェリントンで小型核爆弾が

使用されました。詳しい状況は判っておりませんが・・・」

「お父さん・・・今の聴いた？ ニュージーランドって・・・」 ゆかりが声を

こわばらせながら言った。

「ジエームスの地元じゃないか。いよいよ南半球にも攻撃の手が伸びてきたか」

「ニュージーランドは金融国家だ。都市機能をウェリントンに集中しており

その被害が心配される。それにしても核を持たない国にまで核攻撃をするとは・・・」

「今回の戦争が利益がらみの従来の戦争と違い、宗教という得体の知れない感情に

よって制御できないほどいがみ合っている社会を象徴していた。

研究室に入るとジエームスが血相を変えて近づいてきた。

「佐伯所長すみません。母国が攻撃され召集されました」

「なんだって？ 君はまだ国籍を変えていなかったのか？」

「どうやら彼は申請書を送っているのだが、まだ連絡が来ていないという事だった。」

「まずい事になったな。いつ戻らなければならぬんだ？」

「あさつての便で帰る予定です・・・いいんです。こんな時期だし・・・帰って
祖国のために力になりたいと思ってます。香さんには僕から話しま
す」

大変な事になった。アメリカ、中国で少しずつ戦火が大きくなる中、
日本も

内戦の様子が連日報道されており、佐伯もこの戦争の行方が心配で
あった。

それに何人かの知り合いもまだ日本で生活していた。

しかし核を持たない国は核攻撃を受けないというこれまでの考え方
が甘いと感じ

ざるを得ない今回の事件は、やがてこの小さな南の島にもやってくる
かもしれない

恐怖を感じさせた。対策を立てねば何れ大変な事態になる事は間違
いない。

俊夫は自分の仮眠室に戻り研究資料をもう一度チェックした。

「これを使うしかない・・・」そのとき部屋のドアをノックす
る音がした。

「お父さん、・・・ジェームスが・・・ゆかりはそう言っていると泣きな
がら

しゃがみ込んでしまった。

「大丈夫だ。今回のは多分テロ的な攻撃だろう。戦争のように長引
く事は無いと思う。」

様子を見よう。敵国が無ければ戦争にはならない」

2日後ジェームスを見送りに空港に家族全員で来ていた。ジェーム
スの母親は

様態が思わしくなく見送りには来られなかったが、心配であっただ
ろう。

「みなさん本当にありがとうございました。きっと無事で帰ってき
ます」

「ジェームス・・・私を一人にしないでね。必ず帰ってきて・・・」
ゆかりはそう言うとジェームスにしがみついた。

「ジェームス君必ずかえって来るんだぞ。これを持って行きなさい」
・

まだ実験中だがこのスプレーは人間の戦意を喪失させる働きがある。
風向きにもよるが

効果はあるはずだ。使わなくてもいいことを願っているが」

「佐伯所長これは極秘プロジェクトの？」

「そうだ。生きて帰るんだぞ」

超音速機を家族で見送りながら佐伯は泣き崩れそうになるゆかりの
肩を抱いていた。

ニュージールランドの攻撃以降エスペランサでも連日その動向が報道されていた。

南半球で初めての攻撃がいきなり核攻撃であった事、またいったい何故攻撃されたのか

理由どころかその対象となる敵すら分かっていないなど謎だらけであった。

ゆかりの婚約者のジエームスからは毎日のように連絡があった。彼の話では軍を含め

戒厳令体制での対応をしているが街はいたって静かで、戦争の様相はまったく無く

農村部にいたっては従来通りの生活だそうである。都市住民はほとんどが農村部へ疎開し

攻撃を受けなかった都市でも居住者は僅かになっていくらしい。ウェリントンの被害は半径500mが壊滅したが官庁施設での爆発

だったのと
幸いにも日曜日だったため被害は少なかったらしい。それでも70

0人が犠牲になり
数千人の被爆が確認されていた。

「お父さんの言うとおり敵が居ないから戦争にならないのね。でも良かったわ」

「最近の攻撃がどうも宗教的な違いでの内戦のような気がするんだ」

「テロって事？だったら敵は自分達の中に居るんじゃない。余計に怖いわ」

2050年頃から世界的に広まっていたスピリチュアルブームによって、それまでの

宗教団体が細かく分裂して行き数千の宗教団体が産声を上げた。し

かしこれらが
信者獲得のために熾烈な争いを始めた。最初は拉致や小さな抗争だ
ったが、アフガン
カンボジア戦争をきっかけに過激さが増して行った。中国などは2
0億の人口のうち
4割以上が新興宗教派であり国家もはやそれを抑え込む力を失っ
ている。
ジエームスがニュージーランドに戻ってから研究室ではゆかりが俊
夫の助手をしていた。
香水と言っても嗅覚からの刺激作用で人間の行動をある程度コント
ロール出来る
レベルにまで達しており、もはや平和のための兵器という意味も持
っていた。
過熱化した宗教間同士の争いの源は憎しみである。高度な社会がス
トレスを増大させ
それにより薬物依存者が続出した。また社会における所得格差が宗
教への逃避を
促し過激なテロ行為へ移行していくものもあつた。
俊夫の研究している香水は神経性ガスや麻酔などとは違い人体への
影響は無い。
動物実験で唯一心配された症状は闘争本能が無くなる事だつた。
自然界ではどんな結果が生まれるのかは未知数である。そのため大
量の拡散には
疑問が残つた。
「お父さん、このカプセルでどのくらいの人間に効果があるの？」
ゆかりが1cmほどのカプセルを持ちながら尋ねた。
「それ一つで環境にも影響されるが2〜300人には効果があると
思う」
実際には風向きによっても影響されるため密室でのデータは当てに
はならないが

かなりの効果が期待できた。

2118年になると戦火も激しさが増しておりエスペランサ国内でも防衛組織の

結成を求める声が増しに高まってきた。何度かの国会審議の末2118年中に

軍隊としての防衛組織を発足する事になった。隊員は20歳から50歳までの

成人すべてが対象となったが、子供を持つ女性は対象外であった。

この法案が可決するや空前の結婚ブーム・ベビーブームが起こったが政府は

それを容認していた。軍備は日本式を真似たRA-3型試作機・米軍から購入した

LSW戦闘機・レールガン等々国防費は国家予算の70%を使った。このため病院以外の施設は休みとなり 子供の学習は3次元テレビでの放送に

頼る事になった。

軍事施設は急ピッチで建設されていった。米国から購入したレールガンは島の周囲に

200基設置された。またLSW戦闘機は海底から高速エレベーターによつて海面へ

昇りそこから垂直上昇させるよう改良した。

「ゆかり、気をつけて行って来るんだぞ。風邪なんかひかないように・・・」

俊夫は涙がかすむ目でゆかりを見つめていった。2年前ジエームスと式を挙げた

ゆかりだったが子供は授からず、今回の徴兵で訓練生として同盟国オーストラリアで

4ヶ月間の訓練を受ける事が決まった。長男の真吾は既にエスペランサ軍司令部の

少佐であった。また次男の祐介は北方協力軍のメンバーとして日本

へ応援に行っている。

「ゆかり・・・何かあったら必ず知らせるのよ。お母さんずっと祈ってるわ」

ゆかりを抱きしめ涼子が言った。

「大丈夫よ。ただの訓練だもの。元気で頑張ってくるわ」

「ゆかりこのペンダントを持っていきなさい。ジェームスに渡した時の1000倍の

効果がある。それに中に製造法も暗号化されて入れてある。必ず無事で帰っておいで」

空港のアナウンスが17時ジャスト・オーストラリア行きチャータ

ー機の搭乗手続きを

告げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6905i/>

丘に眠る記憶

2010年10月21日22時35分発行